

一

三ヶ年の新制中学の発足は、戦後の苦しい事情の中で発足して、大変な事業であったけれども、併しその実質から言うならば、既にそれまでに八ヶ年の義務教育が成立していたのであるから、僅か一年の延長であったとも言えるのである。殆んどすべての者が、六年の義務教育の後に最低二ヶ年の高等小学校の教育を受けるという実態が実現していたのである。その上に、戦時中のみではあったが、青年学校の義務制という奇妙な義務制もあって、そういう雰囲気からすれば、義務教育九年というもの、従って新制中学三年までの義務はそれ程、飛躍したことでなかったのである。いわば高等小学三年までの教育をすべてがおなじように教育を受けるということになったにすぎない。

しかしだからといって、新制中学校は、高等小学校教育三ヶ年ではなかった。それは中学校の名前を受けついたのでにふさわしく、旧制中学校の実質をも遺産として受けついたのである。かつて、旧制中学校が、僅か $\%(*)$ の者の教育をしか受けもたなかったのに対して、新制中学校は一〇〇%の少年を教育するのであるから、その教育の内容も方式も根本的に考え直さるべきであったが、しかし実際には、新制であろうと何であろうと中学校の教育であるという名目は、旧制中学校の実体をも遺産として受けつぐことになった。

*ライブラリー編集部補足

原文は空欄。二〇一八年中央教育審議会の資料には、昭和十五年時点で七%とある。

現在でも中学校の先生で、本当に中学校の教育を行なうためには、現在の生徒の中から成績の悪い者半分位を淘汰しなくてはならぬということを公言してはばからぬ者がいる。つまり成績が上位の者半分だけが中学校の教育を受けるに値するという考え方なのである。これ

はまさに考え方が逆である。中学校は、すべての少年を教育する場所なのであって、何よりもまずそういう教育機関としておかれているのである。そこから如何に教育すべきかを考えて来るべきであるのに、中学校の教育というものが何かきまつたものとして考えられていて、すべての青少年の内、半数はそれを受けるにふさわしくないと断定するのである。考え方が逆である。

このような考え方をさせる根本には中学校の教育というものについて過去の旧制中学校の幻影があるのである。中学校らしい教育などという言葉でごまかされるのであるが、その中学校とは、本来は義務としてすべての者が進むべき学校であるから、中学校らしい教育とはすべての者が受けることの出来ることである筈である。そういう教育が考えられることなく、半数を淘汰しなければならぬと考えるのは、中学校という名目から生み出された幻影があるからである。教育者の中に今だにそのような考え方のものがあるということは、中学校教育の真のあり方が理解されていないことのあらわれである。つまり現代では中等教育はもはや大衆のものであるということが理解されないで、過去の中等教育観が残っているということである。現実にはちゃんと大衆教育としての中学校が存在するにかかわらず、そのような古い観念が残っているということは、如何に人間の観念がかわりにくいものであるかの一つの事例とも見る事ができる。

三

さてこのように形の上では大衆教育機関としての中学校教育、観念的にはまだ真に割り切れないで旧制の名残りをとどめているこの中学校の上に三年の高等学校が成立したのである。これは戦前の高等学校という名前を受けついでいるけれども、実質は後期中等教育として

つくられたものである。高等普通教育などという言葉が戦前にあったけれども、そういう考え方が高等学校の中に観念として引きつがれたかの如くである。必ずしも中等教育大衆化の線から出たものであるという意識は一般的にははつきりしていなかった。ここに高等学校という名前の教育の不幸が発生するのである。

六・三・三制は、八・四制という形から生み出されたものであって、それは中等教育大衆化の考え方から出たものであることは衆知のことである。それは新制高等学校が発足の時にとった制度をみれば極めて明らかである。戦前は、男子は中学校で女子は高等女学校であったが、新制高等学校においてははつきりと男女共学制をとっている。それは女子に対しても男子と同様な後期中等教育を与えようというものであって、中等教育というものを大学への準備とか、異なった階層の者の教育をしようという過去の教育観とは全くことなるのである。男子と女子との区別をまず廃止しようとしている。戦前は中学校と実業学校とは明瞭に異った種類の学校であった。学校制度全体系の中に位置づけられ方は全くちがったものであったが、戦後の新制高等学校においては、総合高等学校の普通課程と職業課程というちがいでしかなかった。さらにその総合高等学校は学区制をとって、それぞれの地域の生活に根ざした教育を行い、その地域の生活者が、高等学校へ入ろうとすれば、誰でも入ることが出来、その誰に対しても必要な教育を行うことが出来るように、総合的にあらゆる課程をもつことと出来る学校として位置づけたのである。或は位置づけようとしたのである。さらにまた、定時制という形態を設けて、働く者であったも、その生活の形態に合わせて教育を受けることが出来るように考えられた。教育の方法においても、単位制がとられて、生徒がそれぞれの要求にしたがって教育を受けることが出来るようにしている。つま

り様々な要求をもった生徒が、その要求を満足し得るように学校の形をととのえようとしたのである。

これら一連の方針は、この段階の教育を大衆のものとして位置づけ、普及しようとした所から生れたものであることは明らかである。この諸方策がアメリカの占領時代に行なわれたこともあって、この方策の根底には多分にアメリカ的な考え方があることも確かである。だからこそある意味で徹底した中等教育の大衆化方策であったとも言っているのである。

四

こうしてそれから十数年の間にこの方針はある意味で成功した。しかし一方では発足の当時とられた総合制、単位制、学区制などは何時のか姿を消した。定時制高校などというものは、その理念通りには発達せず、むしろ全体としては衰微しつつある。それにもかかわらず、今や六五%のものが高等学校すなわち後期中等教育へ進学するという実体が出来あがりつつある。大衆化の諸方策のいくつかがつぶれたにもかかわらず、大衆化が実現しつつあるということは奇妙なことであると考えられるが、そこに、この問題の日本の特色が見られるともいえるのである。そしてそこに現在の後期中等教育の改編問題がひそんでいるといえる。

新しい高等学校の理念を生かそうとした総合制も学区制も、単位制も、定時制も大体において見る影もなくなったといつてよい。それらの制度は日本の風土に合わなかった輸入品であったからだという見方もある。そういう見方もあるが、ともかくこの十五年間に、日本はそれを育てて来たのである。もらい児であったかも知れないが、十五才迄育てればもう日本の家風になじんでいるのである。もらった時の衣裳をすてて、わが家の衣裳をつけている。

衣がえをした理由はなんであったろうか。高等学校の段階までを学区制にした理由は、後期中等教育の段階までを、今の小中学校のような考え方で配置をしようという考えのあらわれであったと見る事が出来る。誰もが中学校に入るならば、中学校の配置は現在のように考えることは言うまでもない。高等学校についても、それが誰でもが入りうる学校にするには、中学校の配置とおなじような考え方になるのは当然であろう。そこで、学区制という形式が考えられたのである。しかしこの衣裳は日本の風土に合わなかったのである。高等学校をどのように誰でもが入れるものとしておくことには、日本の人々は不賛成だったのである。それはあくまで、大学教育を受ける者の行くべき学校であつてほしかったのである。曾つての中学校、高等学校の如くであつてほしかったのである。それは新制高校においては、普通課程である。人々は普通課程をそういうものとして育てあげた。高等学校の中には、そういうものとして育つには条件にめぐまれないものもあった。概して農村部の学校はそうであつたが、都会の学校は、そういう方向にまっしぐらに突進した。こうして学校差をつくりあげて、それを口実にして、学区制を廃止したのである。高等学校が大学への通路である人々は、その通路たる性格をもつ学校へ自由に通学することを要求するのは当然であつて、学区制などというのはその点から見て愚にもつかない制度であつた。

この考え方は同時に、職業課程と普通課程の差別待遇を必然的にもたらし。この二つは旧制度下における如くやはり格差があつてしかるべきものだという考え方なのである。或る県の、知事は一方にスマートな普通課程の生徒が居り、一方に肥桶をかつぐ農業課程や油だらけになる工業課程の生徒が居るのは教育上好ましくないという理由で分離を行なつた。階層のちがう人間と一緒に教育出来ないというわけ

であろう。総合制高等学校については、先年来日したコナント博士が、将来その地域で社長となり、労働者となる者が共に人間として同じ学校で教育を受けることこそ重要であると述べて、わが国の方針に対してはどうしても納得されなかつたことがある。

コナント博士の考え方はアメリカの民主主義をささえる教育観としてとくにこの際考えてみる必要がある。日本でそのような考え方が持続しなかつたのは、普通課程と職業課程との格差があるからである。平たく言えば頭のよいものは、そして将来エリートとなるものは普通課程に進み、頭の悪いものは職業課程に進むという一種の不文律がある。誰もがそれを当然と考えている。ということは農業、工業、商業の実務の世界に進むものは第二流だということになりかねない。大学に進むのは実務の世界に入らないで、管理者となる。それは第一流であつて、職業のちがいは人間の等級のちがいでもある。こうして職業課程に入る者は、劣等感のとりこになっている。だから普通課程と一諸に教育しては教育上好ましくないことになるのである。職業のちがいは社会における役割のちがいであつて、人間の貴賤のちがいではないなどということは単なるお題目にすぎない。そして普通課程と職業課程とは人間の貴賤の差別につながるのである。日本人の内心にはこのような考え方がどこかにある。

五

このような考え方は社会全般には学歴尊重となつてあらわれる。最近学歴主義は批判されて能力主義が叫ばれるが、日本では学歴こそ能力を示す最もよいシンボルなのである。そこで学歴によつて、その進むトラックが異なるのである。前に述べた日本人の考え方からすれば、そこには矛盾はない。能力主義の最も端的な形が学歴主義なのである。頭がわ

るいから、お前は工員なのだ、その証拠に大学を出ていないではないか、くやしかったら頭がよく生まれ直したらよいといわんばかりである。

この単純素朴な考え方は年功主義にもつながる。学歴が唯一の基準で、その人の進むべきトラックがきまると、それからは年功がその人間の評価となる。年功によってそれぞれのトラックの上での貴賤がきまるのである。そこには人間そのものを見ろという考え方はない。能力を具体的にとりあげて適材を適所に生かすという精神もなければ、従ってその技術もたないのである。学歴以外に人間を見る尺度はない。東大卒となれば、無条件に尊敬されるのである。誠に素朴きわまらない人間観というべきである。

それであるからこそ、社会の人々の学校に対する欲求は強いのである。無条件に学校に一切を賭けている。小学校の生徒について両親の意見を聞くと、まず九〇%までは大学へ進学させたいと願っている。これは農村でもそうである。これが、高等学校への進学率を六五%にもした最も大きな力だと見て間違いない。それなら九〇%がどうして六五%まで低下するかといえば、それは中学校を卒業する迄の間に子供が示す成績によって、あきらめざるを得ない者が出て来るということである。容れ物が無限にないのだから、入学試験と称するものによってフルイ落す以外にない。結局何等かの形でフルイ落されるのである。涙をのんで、劣等感と共にあきらめるのである。しかしその他の手段で学校に入学できるチャンスがあるなら、親はあらゆる手段を講じる。それが小学校からトラックが出来て来る所以である。大学の付属小学校に入ればそれで一生がきまるとも言えるわけである。

総合高等学校の問題、普通課程、職業課程の問題、学区制の問題を日本が処理して来て現在の形に落ちついたのは、右のような教育観が根底にあるわけである。新制高等学校の理念から生れた制度が日本の

風土にあわなないという根本は、本質的にそこにあつたのである。

六

ここでもう一つ高等学校における教育方法の貧困ということを考えてみたい。高等学校の教育方法は確かに前世紀的である。しかしそれも実は単に高等学校の先生達がなまけているということばかりから来るものでなく、根本には日本の教育観の貧困から来るのである。

教育は一人一人を育てることだといったら誰も不賛成の者はいるまい。当り前だというのである。高等学校はそういう教育をやっていないではないかといったら首をかしげる人が多いであろう。一人の教師が教壇の上で講義をしている。五十人の生徒が聞いている。こういう授業のあとでテストが行なわれて、成績評価をする。これが教育だと信じて疑わないのである。

前に述べたコナント博士が、日本の高等学校で、驚いたことがあるといつて話されたことに次のようなことがある。日本では一年の数学の教科に成績評価を最低の一(五、四、三、二、一の一)をとつて、二年にも一、三年にも一をとつて、そのまま卒業してしまう者があるといふことを聞いて驚いた。アメリカでは、一をとつたら、もう一度やらせる。それでも一や二をとつたら、もうやらせない。アメリカでは、卒業の時は五か四を揃えて自信をもたせて出してやるのがよき教師だと考えていると。

この話は示唆にとんでいる。日本では高校卒業の時に、自信をもって出て行く者は居るまい。反対に大部分が劣等感をもっているのである。自分はこれでもって世の中に働くのだという腕と頭の自信をつけてやるのが教育ではないか。一人一人を育てるとはそういうことである。そういうために教育のなすべきことがある筈である。

教師が講義をするという今の教育の形は一体何をしていることなのか。そんなことを疑ったことはないのが日本人である。しかし教師の講義についてゆける者は、実際の所二〇%位のものである。あとの八〇%は時間の浪費をしているといった方がよい。だから高等学校の先生は口を開けば生徒の程度が低いという。しかし実際に六〇%も七〇%もが入学して来るのであるから、教育の方法がかわらなければ、そなのである。これは中学校においても同様であるが、頭脳をきたえるような訓練方式の教育をとるべきなのである。それを話を聞かせておくだけで、あとはテストをする。点のわるいのは頭がわるいのだではすまされない。人間が多ければそれもよいかも知れないが、もう十年後に、人間の数が半分へったとき、そんな教育で、くずばかりを出していたら忽ち社会はこまるであろう。

日本人は生れつき頭のよしあしがきままっているという考えが強いが、そういう点もあるにはあるが、頭脳は訓練によって発達するということも事実なのである。その訓練をする方法は日本の高等学校には全然ないといってよい。話を聞かせるということで、それが生徒のペースに会わなければ、生徒は遊んでしまうことになる。そうしておいて、だめだときめつけるのである。つまり教育とは何をすることなのかについて全然わかっていない。話をして点をつけることだと思っている。それで出来るわける者は振り捨てるのである。中学校でも、高等学校でもこうして、半数以上が振り捨てられている。東京の或る高等学校では三割教育を公言してはばからぬ教師がいる。七割はお客さんだというのである。

こういう所で、人間がどう育つであろうか。生存競争といえはそうかも知れない。しかし本当は生存競争というものはそんなものではない。人間社会はそれぞれ個人がその個性を發揮して、お互に助け合う

のである。分業社会なのである。如何に個性を發揮するかで競争するのである。そこにフェアプレイがある。今の中等学校の教育では、人間は皆一色に暗記の機械として見られている。様々な教科があるけれども、皆本当にその教科の訓練をしているわけでない。こそ暗記を強要しているだけである。そして万ばなくこそ暗記をする機械が成績がよいのである。しかしそれは何にもならない。その証拠に学校を卒業したら大部分忘れるのである。試みに高等学校の先生に、自分の専門の教科以外のものを生徒と一諸になつてテストを受けたら何点とれるか聞いてみるがよい。まず三〇点と答える人が多いであろう。だから高等学校は奇妙な所である。専門以外は三十点の教師十人がよつてたかつて、一人の生徒にみんな百点とらなければ頭が悪いのだという態度で対しているのである。生徒こそいつらの皮である。そこでは何の本質的な勉強は出来ない。ただがむしやりに記憶機械になる以外ない。そのような馬鹿なことはやめたらよいが、そうしたらまるで馬鹿者扱いにされるのである。劣等な人間のように扱われるのである。教師のように何か一つの教科は百点だが、あとは三十点でよい筈だ。一つでも本当に物を考え、本格的に努力をすればよい筈だ。所がそうしたら問題児になるのである。

こんな所で、何かを出来る人間がつけられる筈がないではないか。人間として人生の真実にふれて行くことは出来ないではないか。皮相なごまかしの人生である。最近どこかの大学で学生が全員カンニングした事件があつたが、そうなるのも必然である。真実ならざる教育がどうして、人間の真実を引き出すことが出来よう。

しかも今やそういう所へ、大部分の人間が殺到して、そういう教育を受けたいと願っているのである。そこに大きな問題がある。一般人々はそれが教育ならざる教育だということがわからないせいもある。が本当はそんなことはどうでもよいのである。社会のトラックに

のるためには学歴が必要なのである。その社会がまた人間を育てることを問題としていない。学歴がありさえすればよいのである。学歴がないものは無情に振りすて、問題としない。非常の社会である。だから両親は必死になって子供の高校入学を願うのである。これが後期中等教育の大衆化の実情なのである。

七

このような零囲気は勤労青少年の教育に力を入れる零囲気でないことは言うまでもあるまい。定時制高校という新しい制度を発足させたけれども、結局ものにならなかったというべきであろう。これまで述べて来たように日本の教育は根本的に、人を育てる考え方がないのであるから、まして中学校を卒業し、高校の入学試験を受けない者にまで教育の手をのばそうとしない。そこには頭の悪い者には教育の必要はないという考え方すら見られる。もちろん僅かの慈悲がないわけでないから、慈善事業のような定時制や通信制の教育が開かれなわけではない。しかしそれは勤労青少年の生活を考え、それに適合した教育の内容とを構成するというような所まではいかない。昼間働く人間の教育だから夜学校を開くという程度である。しかし昼間八時間の労働をしている者に、更に夜四時間の授業をさせようとするのであるから考えてみれば無慈悲な話である。しかもつい最近問題となった如く、多くの産業は、定時制を差別待遇して拒否するのである。誠にふんだり、けつたりである。しかもこういう働く青少年に対する教育は全く全日制の教育の焼き直しである。例えば商業の教育で、昼間商社に勤めて実務においては教師よりよく知っている生徒に対して平然と全日制生徒に対するとおなじ教育が行なわれている。或は昼間企業内の技術者養成所で、或る点では工業高校より程度の高い教育をうけ

ている者が、集団的に夜間の定時制に通学するのである。それは卒業証書がいかに物を言うかという社会の姿をあらわすと同時に、彼等に対する社会の暖かい思いやりの目が少しもないことを示している。それが日本社会の青少年に対する教育のセンスなのである。

青年学級に至っては現在のようない事態となつてはもはや論外である。高等学校への進学が六五%ともなつた今では、社会教育としての勤労青少年教育などというものは無意味となつていたのである。それは戦後の中等教育の発展途上における過渡的な存在としての意味しかもたないと見るべきものである。ILO条約へも加入しようとしている今や、勤労青少年の教育に対して現在の如き体制をもちつづけることは、日本の恥辱となりかねない。

八

今後十年の日本の産業の発展を展望し、その産業を支える青少年の数が十年後には半減することに思いを致すとき、後期中等教育の成否は、日本の運命を決するのではないかと思われる。その徴候は既に最近の数年の動向にもあらわれている。農村人口の第二次、第二次産業への急激な吸収の傾向は、農業課程の存立を危機に瀕せしめつつある。一〇〇名の卒業者の中、四、五名の自営者しかいないという学校は数多く存在する。それは農業課程の教育の問題であるばかりでなく、高等学校の教育の全面的な再編成の問題である。学校、課程の種別、分布をどうするのかという問題である。今後の産業の技術革新、新産業秩序の成立を考へるとき、現在の如き職業の課程の編成でそれにこたえられるのであろうか。課程のバラエティが現在の如き程度でよいであらうか。各種学校の異状な増加、種類の分化をみると、或は職業訓練の最近の目ざましい膨脹をみるとときには、新しい産業の発展が、

これまでにない人間性を求めていることを知らされる。それは現在の高等学校教育への不満を示すものとも見られる。それらを再編成して新しい後期中等教育を編成することは必至となっている。

現在の高等学校では、普通課程が本体とされていることは前に述べた通りであって、それは過去の伝統的教育観にもとづくものであるけれど、もう一つには大学への入学の問題と関係があるのである。先に述べたような社会の教育観と雰囲気から言えば、有利なトラックに乗るには、大学の卒業がよいことは目に見えている。それには普通課程に入るより外ないのである。それは後期中等教育の全体制を破壊する結果になりかねない。高校へ入学するものがみな普通課程を希望すれば普通課程という容れ物を少なくすることは望めないであろう。しかし、今の普通課程の如き試験準備の学校は有害無益であろう。これを教育の本道にもどすことは是非ともなしとげられなければならない仕事である。それをなすには、大学と後期中等教育の全面的関係が検討されなければならないのである。

高等教育においても、教育を受けようとするものを拒む理由はないことは中等教育とかわらない。しかしそれが社会の有利なトラックにのるためになされるのは教育の悪用である。教育は本来そういうものから中立でなければならぬのである。人間が自分を育てようとすることは純粹であるべきであり、それに対して社会は個の発展の見地から教育を実施するのである。それが同時に社会の発展をとまなうのであって、教育は社会の表面的利害関係や権力関係の外にあるべきである。そういう形で教育がなされるとき真に社会も発展するであろうし、教育も発展するであろう。この点から大学が就職へのパスポートの発行所である、ということとは許すべきことではない。そのために大学が利用されることは廃されなければならない。すなわち社会の学歴主義がなくなることは高等教育

の発展にはなくてはならぬことである。それには社会が新しい人事管理の方式を生み出さねばなるまい。ともかくそういうことを土台として、後期中等教育が正しく位置づくことになるであろう。

社会のトラックとは関係なしに、人々はさまざまな理由で教育を受けることを必要とする。例えばよりよき仕事をするためには、仕事を一時中止して新しい教育を受ける必要があることもある。職場もその必要を認めることがある。そのようなとき教育の場が開放されていることが必要であって、あらゆる人々が様々な理由から高等教育を要求するのにこたえられなければならない。そしてそれがトラックと関係のないのが必要である。

かつて教育を普及する時代に教育を受けるものが社会的に有利であるように配慮したことがあったが、今やそういう時代ではない。教育は純粹にそれ自体としての機能を果すように配慮されるべきである。それは教育とは別に社会が人間を評価し、測定し、位置づける制度をつくれればよいのである。

九

このように考えると、後期中等教育は、もはや単なる勤労青少年の教育問題ではないことは明らかである。むしろ、反対に現に成立している教育機関の存立の根拠を掘り起し、根本的に検討し直すべき問題としておかれているのである。それは日本の教育観の根底から考え直してみるべき問題であることが明らかであると思う。

この問題はあらゆる人々の協力がなくてはなしとげられない。日本人の教育観の向上がなくてはなしとげられない。そういう意味で世紀的な問題と見なくてはならない。

(国立教育研究所教育内容研究室長)